

槐

かい

岡井省二創刊

平成26年1月号



平成二十六年一月一日発行 第二十四巻第一号 通巻第二七一号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

双 六

高橋将夫

万
物
に
命
吹
き
込
む
初
明
り

全
身
を
大
き
使
ひ
筆
始

母
ま
る
で
お
鏡
さ
ん
の
ご
と
坐
る

白
山
を
越
ゆ
る
高
さ
羽
子
を
つ
く

九頭竜の鱗きらめく高志の春
元朝の雪は常よりやはらかし
羽子板をはみ出してゐる写楽顔
繭玉は福の重さにしだれをり
よく回る独楽は微動もせず回る
双六は人生よりも確かなり
宇宙暦百憶年の大旦

槐安集

水野恒彦

秋の夜や壺中の天に遊びをり
芒野やむかしは標野紫野
鶏頭を抜きたる息の定まらず
蚯蚓鳴く闇のどこかが弛ゆるみゐて
穴惑ひするりと岡本太郎の目

加藤みき

熨斗鮑礁に跳る白波よ
初紅葉はつばぞんぶんに手を繋がれよ
甲冑の骸の顔や蠡斯
白壁にセピアの日影秋の昼
きざはしの葉つばの乱舞神還る

石脇みはる

川の中錆鮎釣の動かざり
城跡の石垣高しカンナ咲く
餅米と小豆漬けたる小春かな
父母をりて焼松茸の匂ひかな
稲こぎのほこりの中の父と母

中島陽華

山からのひと雫なり初鯨
箒逆さの大徳寺檀の実
嫁ぐかに冬瓜ありて鯨幕
灯火親し一ページ目はおこぜの絵
後の雛翁の文を懐に



竹内悦子

鷹ヶ峰三山椎の実椿の実

光悦寺

先生に逢ひに行きませ泥鱈鍋
転んではならぬ道なり石榴の実
点滴の雫落つるや桐一葉
小春日のお岩出てくる鏡かな

雨村敏子

給はりし和顔愛語や石路の花
法然の台なりけり紅葉山
臍の緒のごとくに瓜の蔓を切る
勾玉の形がふたつ秋茄子
なた豆の仕舞の花に水の玉

本多俊子

秋蝶や夕べの御所の森ふかく
むらさきは日本のいろと式部の実
木の橋は木の匂ひして朝の月
秋草や笑ひすぎたるあと哀し
水澄みて石には石の貌ありぬ

近藤喜子

瓢の実の寂しき人に鳴りにけり
かたち得し水の悦び露光る
木の実降る静けき森の息づかひ
詩の神の囁きかとも秋の聲
柞散る刻々もののあはれかな

瀬川公馨

大蓼のももいろをこし拵へむと
秋茄子ゲニウス・ロキを祀らむ
アメリカ合歓小鳥くる日のトポスなり
誰が阻むや極撰の秋の風
弔ひのわたの名代曼珠沙華

久保東海司

輪を少し拵踊りをたやすくす
熟柿落つ音に始まる寺の鐘
泳ぎ来て潮垂るる髪しぼり切る
蟹の腹啜り湯ざめを酌むもよし
夜の磯の風の切れ味ちぬ釣りに

中野京子

鈴虫の声のわたりや如意宝珠
身を満たす目線の水面舟の秋
待ち人は天上にをり大花野
うつつ世の形消えれば万珠沙華
天寿とも思ひて送り白芙蓉

柳川晋

枝折戸榎延広積一さ九に杖立てかけて神の旅
爽やかに隻手の声隻手の音語ニ神の公案(右手を八ッ子と打寄る事)をたててをり
比賣神の手づから醸す猿酒
秋水を研ぎ出す小豆洗小豆洗ヒ日本の妖怪ひかな
配転も出向もある神集ひ

岩下芳子

金風のカルデラ千里渡りけり
銀行の更地百坪猫じやらし
今日の月誰が撮つても別嬪さん
鬼の子の悶悶として糸揺るる
音声のやさしき秋の大落暉

近藤芳子

舞茶師寺ひ降りし飛天の領布に露の玉
草の穂の飛び散る勢ありにけり
新涼や絹の風呂敷広げをる
まばたきの音聞こえさう月の夜
大花野へ送り三味線に送られて

チャレンジコーナー

白峰の旅 中野池好子

神秘なる埋める青苔平泉寺
生かされるよりも生ききて苔の花
越前の蕎麦屋で使ふ扇子かな
胸うちに一事ありたる夕端居
時々は嘘も方便心太

秋神輿 竹中一花

獅子の頭に散る木犀の匂ひかな
辻辻に法被の子等や秋闌ける
木犀の風に乱るる稚児の列
秋を練る雌雄の獅子の尾に触れし
声直き子らの担ぎし秋神輿

槐市集

阪倉孝子

夢の世は夢のままなり雁渡る
しがらみの解きほぐるるや銀木犀
秋天に彩どり置きて観覧車
吾が影のはなれゆくなり後の月
熨斗つけし鯛の頭や菊花展

柴田靖子

故郷の広がりゆきて零余子飯
夕日のかがやき一段と松手入
掛稲もとほくなりたり夕日落つ
造られて微笑みみせて菊人形
皆たたかつてたたかつて蓮の飯

庄司久美子

鈍行の大和の空や曼珠沙華
あみごしの仁王の舌や実南天
風に竹田の子守唄新松子
二三回の鳩のまばたき菊日和
ひよつとこの面をあたまに秋祭

杉原ツタ子

天高し音頭を取るは豆絞り
澄まし顔野分跡なる鬼瓦
囁きは川音のなかや星月夜
立待の波間に揺るる影なりき
カバン中祭りの余韻ありにけり



鈴木初音

齒の痛み忘れて座する金木犀
神移り無事に終へたり神無月
あらゆるもの戴きものと寒露かな
台風も青春真只中なりし
山粧ふ眼前の佗一掃す

竹中一花

烏瓜提げて訪ひをる茶会かな
奥方と大根召されよ星の宵
今朝秋の銀の水飲み干せり
産土の杜の子の声澄みにけり
炬火たきまを担ぐ百人錠星

田中信行

黒土を踏めば団栗弾け飛ぶ
無人駅口笛吹いて紅葉忌
故郷の香りを添へて栗ごはん
四書五経北京秋天夢の中
朝刊の人生案内曼珠沙華

谷岡尚美

落柿舎に今も蓑笠柿たわわ
郁子垂るる文机見ゆる旧居かな
花束に一枝加へ吾亦紅
秋の楽ブラボーのこゑ響みたる
青柚子をつよく搾りて土瓶蒸

寺田すず江

棉の実の爆ぜて白雲呼びにけり
わが翳になにか急かさる秋の暮
ほとぼりのまだありにけり蚯蚓鳴く
粘つこく生きるとしやうとろろ汁
さねかづら覚めて地獄を見たといふ

時澤藍

堂々のジャンボかぼちやのいびつなる
萩が好き白萩が好き風が好き
神の留守車中の女かしましき
幸せの一こまを撮るコスモス苑
讃岐岩叩けば秋思深くあり

槐集

高橋将夫選

秋の日や流るる早さわが生も
岡崎 犬塚李里子

降り止まぬ雨莢蓮の朱を磨く

見返れば暮るるに早き黄落期

石垣に旧家の重み秋桜

引く蔓に露の重みのありにけり

逝く秋に少女のやうな母を抱く
枚方 熊川暁子

あきつ去り風のひとつを失ひぬ

昼月をさして舞ひ発つ草の絮

魑魅来て灯してゆけり月夜茸

露の夜われ三千の音を聞く

秋あはれ都会の星に呪力無し
大阪 有松洋子

芒原風と山姥駆け抜ける

金木犀夢のなかにも香の入り

一山の気一本の松茸へ

秋だから真面目な話しませんか

色鳥や誠の嘘をつき合うて
大阪 江島照美

ゆきあひの空の渋滞秋日傘

満月に見透かされたる邪心かな

露の世と想着てみても御札買ふ

より高くより遠くまで鱗雲

白鳥に乗りて旅立つえぢやないか
喜屋川 前田美恵子

鉦叩浮き世の扉を開閉す

鬼の声ふと聞こえたる大花野

主無き円座に温み残りをる

金風のするりと光悦垣抜ける

湯上りを天狗に見らる秋の昼
京都船場温泉
京都 竹中一花

石頭の男叱りし秋祭

柿簾里の女のやう笑ふ

槐の旗携へ鷹は大日へ

白雲のほどけゆきけり初紅葉

銀河往来 高橋将夫

石垣に旧家の重み 秋桜 犬塚李里子

どっしりとした石垣にかかる旧家の重みを感じた。風雪に耐えてきた石垣の背景には、コスモスと秋天が広がっている。そして、〈秋の日や流るる早さわが生も〉、〈見返れば暮るるに早き黄落期〉の句では、時の流れと、自分の人生を静かに見据えている。

〈降り止まぬ雨爽蓬の朱を磨く〉と〈引く蔓に露の重みのありにけり〉は写生句にして、ものごとの本質を遺憾なく捉えている。

あきつ去り風のひとつを失ひぬ 熊川 焼子
にぎやかに群れ飛んでいたトンボが消えた虚空には、「風を失った」という表現がなるほどピッタリ。

作者は先頃お母さんを亡くされたが、〈逝く秋に少女のやうな母を抱く〉はその前後の一句。〈昼月をさして舞ひ発つ草の絮も、その母を偲んで詠んだとも思える一句。

〈魍魅来て灯してゆけり月夜音〉は、光っている月夜音を見て、「魍魅来て灯して行った」と断定している句であるが、その発想には脱帽する他はない。

秋だから真面目な話しませんか 有松 洋子
確かに、爽やかな秋はなにかにつけて真面目に話し合うのに絶好の季節と言えよう。「槐」では珍しい口語俳句。

〈秋あはれ都会の星に呪力無し〉では、山里のように満天に星がきらめく夜空を望めない都会が独特の感性で表現されている。〈金木犀夢のなかにも香の入り〉は金木犀の匂いの強さを巧みに表現しており、〈芒原風と山姥駆け抜ける〉は「芒原」と「風」と「山姥」で不思議な虚の世界を創出している。

〈一山の気一本の松茸へ〉は、一本の松茸に「山の気」を込めるという、まさに気合いの一句である。

色鳥や誠の嘘をつき合うて 江島 照美
色鳥は秋に渡ってくる真鶺鴒など美しい色をした小鳥の総称だが、その色鳥たちががしましく鳴き交わしている。それが「誠の嘘をつき合っている」ようだという。鳥の世界を詠んでいるが、人の世のことを言っているのであろう。確かに、いろいろな嘘があるが、心から相手の事を思いつく嘘もある。

〈ゆきあひの空の渋滞秋日傘〉の「空に渋滞する鱗雲」、「満月に見透かされたる邪心かな」の「満月が見透かす邪心」、〈より高くより遠くまで鱗雲〉の「より高く、より遠く」は作者ならではの感性。〈露の世と想つても御札買ふ〉、信じなくても買うのが人情。

鉦叩 浮き世の扉を開閉す 前田美恵子
鉦叩が浮世の扉を開閉するのですか。俳諧。

〈白鳥に乗りて旅立つえちやないか〉、〈主なき円座に温み残りる〉は延広禎一さんを偲ぶ一句に思えた。〈金風のするりと光悦垣抜ける〉は誠に粋な一句。(以下略)